浄信寺通信

令和　６年夏号

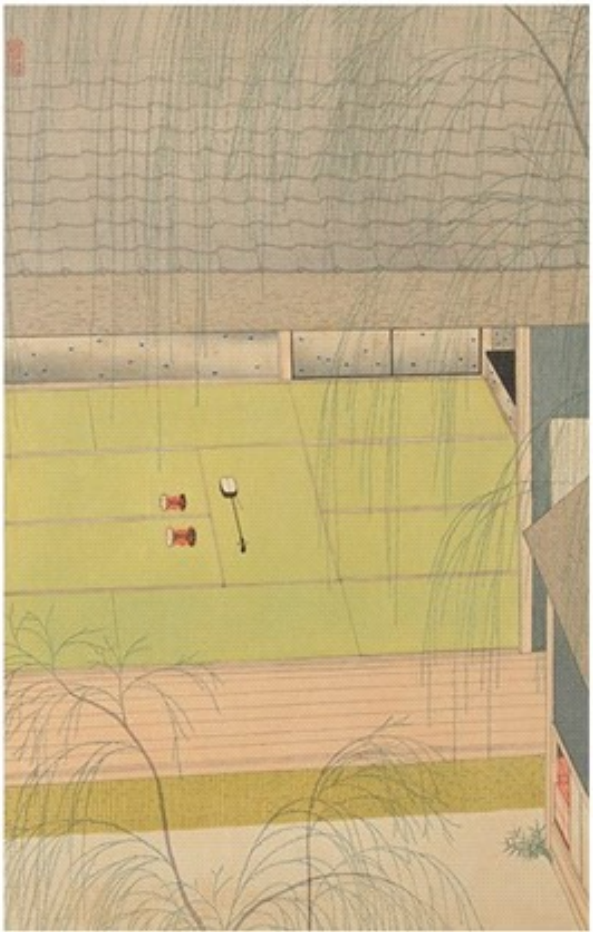
名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL（〇五二）　五六一－一七三六
頒布価格年　千　三百円
（檀信徒会費）

西方にすなわち一つの蓮ありて生ず

（唐の法照禅師『五会法事讃』）

浄信寺副住職　羽塚高照

「留守模様」



※ https://www.pen-online.jp/article/007730.html

左の絵は、大正から昭和初期に活躍した日本画家・版画家・挿絵画家・装幀家の小村雪岱（こむらせったい 1887-1940）という人の『青柳』という木版画です。畳の上に三味線と鼓だけが描かれています。このように、人物を描かず、物や風景だけで人の存在を暗示する手法を「留守模様」といいます。絵画だけでなく、蒔絵や屏風絵などでも使われる手法です。『源氏物語』や『伊勢物語』などの文学や、能や狂言などを主題にして、登場人物を描かず、象徴的な背景や持ち物などから、特定の場面を連想させるものもあります。雪岱の『青柳』は、特定の場面ではないと思いますが、お稽古の始まる前で緊張しているのか、あるいは休憩中でお菓子でも食べているのか、そこに描かれていない人物への想像力がかきたてられます。

ここで留守模様についてふれたのは、お釈迦さまの生涯を描く仏教芸術に、**「ブッダなき仏伝図」**とよばれる、お釈迦さまのすがたを描かないものがあるからですが、まずは、仏教の起源であるお釈迦さまの生涯をみておきます。

お釈迦様の生涯

二五〇〇年以上の仏教の歴史は、かつてインドに歴史的に実在したゴータマ・シッダールタというひとりの人物を出発点としています。釈迦族という国の王子でしたので「お釈迦さま」と呼ばれるわけです。お釈迦さまは結婚し、息子が産まれた

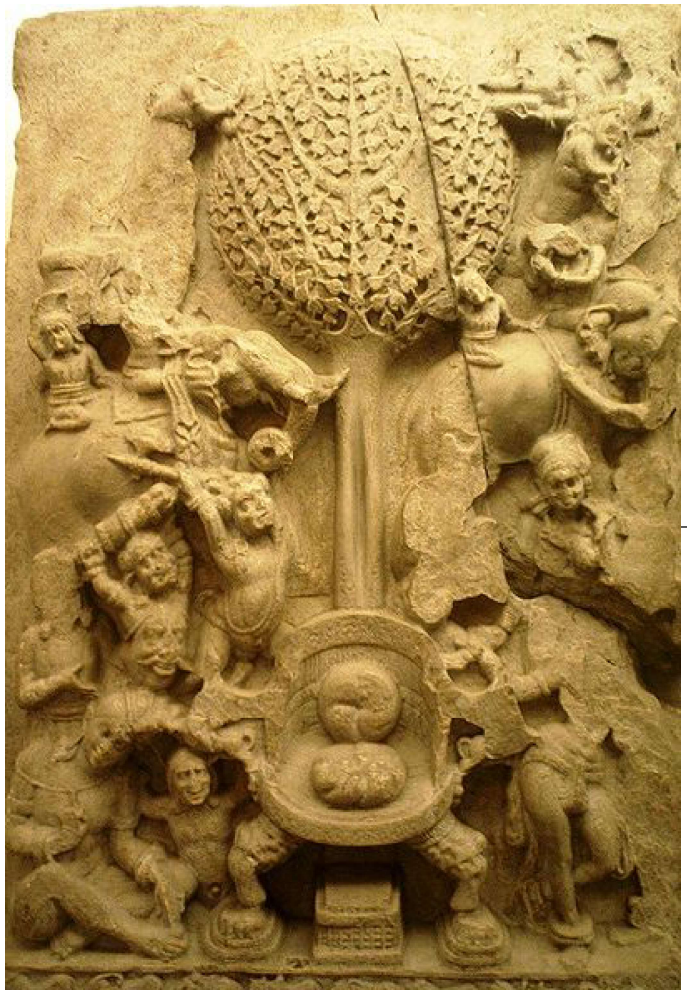
平和公園墓参のご案内

日時：８月１２日（月）
　　１３日（火）

午前８時頃～午後１時頃

インド最古の仏教遺跡サーンチーの仏塔

後に出家します。二十九歳であったとされます。出家者となったお釈迦さまは、六年にわたり苦行と断食を実践しますが、その極限で、それらがさとりへの手段として無益であることを知り、中止します。お釈迦さまは、スジャータという人からの乳粥の施しによって気力・体力を回復し、後に「菩提樹」と呼ばれることになる一本の樹の下に座り、冥想に入りますが、そこに悪魔たちが攻撃をしかけてきます。悪魔とは死・愛欲といったものの象徴でしょうが、お釈迦さまはそれをしりぞけ、さとりをひらき「ブッダ（目覚めた人）」となります。その後、梵天という神のもとめに応じ、お釈迦さまは、かつて一緒に修行をしたこともある五人の出家者に、初めて教えを説きます。その後、四十五年にわたる伝道の生活を送られますが、お釈迦さまも人間ですから亡くなります。八十歳であったとされます。



降魔成道（ごうまじょうどう）

仏典ではお釈迦さまの死を、「入滅」「涅槃に入る」と表現します。仏教ではお釈迦さまは、肉体をもった存在としてはこの世にいないけれど、いまも実在している、と信じられています。お釈迦さまが火葬された後の遺骨（＝仏舎利）が分配され、その仏舎利を納めた仏塔が各地に作られるようになります。仏塔は、まさに永遠に実在するお釈迦さまそのものであると考えられました。ですから、その仏塔の側面や、そこへと至るための門や欄干などをキャンバスにして、お釈迦さまの生涯を物語る仏伝文学や、その前世での功徳行を物語るジャータカをモチーフとする浮彫彫刻などの仏教芸術が発展していきます。

「ブッダなき仏伝図」

その仏塔のまわりから、私たちが今日でも見ることのできる仏像も出現してくるのですが、実は、人物としてかたちをとった仏像がつくられるようになるには、仏滅後四〇〇年以上経ってからの紀元後一世紀頃を待たなければなりません。それ以前は、「ブッダなき仏伝図」とも呼ばれ、お釈迦さまのすがたを直接描くということはしませんでした。お釈迦さまの存在は、その足跡（仏足跡）や菩提樹などの象徴で暗示されるのみだったのです。

降魔成道と称される上図の彫刻は、お釈迦さまが悪魔を調伏し、さとりを得た場面を表現した彫刻で、紀元後二世紀頃に南インドでつくられたものです。主人公たるお釈迦さまは描かれず、菩提樹とその根元にある空の座席で暗示されるのみです。まわりに描かれるのは悪魔ですが、左側は襲いかかる様子が、右側は退散してく様子が、一つの彫刻のなかで表現されていると考えられています。

初転法輪（しょてんぽうりん）

右図は、お釈迦さまの初めての説法（初転法輪）の場面の彫刻です。ガンダーラで一世紀頃につくられました。五人の出家者と、もう一人は梵天でしょうか、彼らが礼拝する先には、法輪と柱が描かれるのみです。初転法輪は、鹿の多くいた鹿野苑という場所だったとされます。お釈迦さまは様々な場所で多くの説法をされま

したが、二匹の鹿が見守っている様子が描かれていますので、これが初転法輪の場面だということが分かります。

右の写真は、宝階降下（ほうかいこうげ）つまりお釈迦さまが兜率天（とそつてん）から降りてくるという物語の場面の彫刻です。一世紀ころのもので、現在のパキスタンで発見されました。天と地上をつなぐ階段があり、そのまわりを神々が見守っています。しかし主人公の姿は描かれず、階段の下のほうにただ足跡のみがあるだけです。

このような彫刻は、仏塔の単なる装飾ではなく、お釈迦さまの生涯を物語る仏伝文学とセットで、「絵解（えと）き」のようなかたちで使われていたと思われます。先述したように、仏塔のあるところにお釈迦さまは実在しておられると考えられました。その仏塔に仏弟子たちは集まって、お釈迦さまの教えを皆で声を合わせて歌ったり、お釈迦さまの生涯を物語ったりしたものと思われます。集まっている聴衆は、お釈迦さまのすがたを、そのお釈迦さまの描かれていない彫刻の上に、ありありと思い描くことができたでしょう。描かれ固定された像よりも、むしろよりいっそうイキイキと、画面のなかを動き回るお釈迦さまのすがたを思い浮かべることができたのではないでしょうか。聴衆は、ただ聞くのではなく、物語に集中し、能動的にお釈迦さまのすがたを念じるというかたちで、その絵解きに参加していたと思われます。すがたを描かない彫刻は、まさにそこに集まる仏弟子たちそれぞれが、お釈迦さまと出あうことのできる舞台装置としての役目を果たしていたのではないかと思います。

本来あるべきものがそこにないということが、不在であるということが、かえってその存在を浮かび上がらせるということがあるのではないでしょうか。亡くなった人の遺品、その人がいつもいた場所など、その人がいないということが、いままでそこにあった存在というものを、より一層つよく感じさせるということがあろうかと思います。「**ない**」ことが「**ある**」ことを感じさせるという、不思議な感覚だと思います。

私たちにとってお仏壇やお位牌、お墓や納骨した場所が大切であるというのは、そういう感覚が呼び起される場所だからなのだろうと思います。仏壇やその中の位牌、墓石や遺骨、あるいは遺品が、亡くなった人そのものでないことを私たちは、もちろん知っています。しかし、そういったものを私たちが大切に思うのは、そこが亡くなった人と出会える場所だからだと思います。

お釈迦さまが涅槃（ねはん）に入られ、仏弟子たちはお釈迦さまに会うことはできなくなりました。しかし残された仏弟子たちは、仏塔や「ブッダなき仏伝図」を介して、あるいは伝承されている教えの言葉のなかで、お釈迦さまに出あうという体験をしていたのだと思います。仏弟子たちの思いの

宝階降下（ほうかいこうげ）丸で囲まれたの所に足跡が彫られている。

中で、念じる対象として、お釈迦さまはずっと存在しつづけていると言えるかと思います。

「ブッダなき仏伝図」は二〇〇〇年前のインドの話ですが、これは、いま現在の私たちにも共通することであると思います。私たちが行う法要というものは、阿弥陀仏と、その浄土に往生された方々と、私たち一人ひとりが出あうための舞台装置なのではないか、ということです。『阿弥陀経』は、阿弥陀仏とその極楽浄土をほめたたう経典です。亡くなられた方も、阿弥陀仏のおられるその浄土に往生されます。『阿弥陀経』を唱えることで、その法要の場が、私たちは煩悩をもって生きていますので、浄土そのものではないかもしれませんが、浄土へと開かれた場となる。お経を唱える、そしてそれを聞くということには、そんな意味があろうかと思います。

お経は亡くなられた方のことを直接うたうものではありません。その方がおられる場所のことをうたっている。私たちは、阿弥陀経を唱えながら、そこにいるはずの存在、それは不可思議で目には見えませんが、そこにいるはずの存在を念じ、思いを向けるのです。

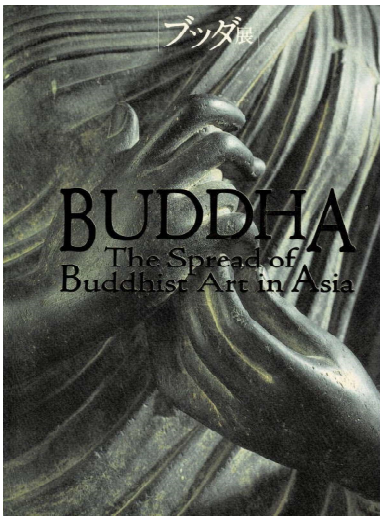
そういうかたちで、私たちは、目には見えない存在に、会うことはできなくなってしまった存在に出あうことができるのです。儀式・法要とは、そういう意味では器です。そこに参列する一人ひとりの念じるという行為が重なって、法要というものは完成するのだと思います。

親鸞聖人の書かれた『教行信証』という書物のなかに、次のような言葉があります。（真宗聖典　１８０頁）

この界に一人（いちにん）、仏の名（みな）を念ずれば、　西方にすなわち一つの蓮（れん）ありて生ず

あちらとこちら、彼岸と此岸、浄土と穢土。浄土は、私たちがいる世界とは違う世界としてたてられるのですが、この世界で私たちが、仏の御名を念ずるならば、「西方」つまり西方極楽浄土に一つの蓮の花が咲く、というのです。浄土は私たちと無関係にあるのではありません。「蓮の花が咲く」というのは、たとえなのでしょうが、浄土、そしてそこにおられる方々と私たちとは、念ずることでつながっているのです。

（副住職　羽塚　高照）



参考資料・引用：ブッダ展ー大いなる旅路 1998年開催された展覧会資料

住職の独り言

今年の寺報は、副住職の文章を掲載しました。

今年は新年早々能登の地震で、知り合いの寺院にも堂宇が全壊して避難生活を余儀なくされていると聞きおよび複雑な思いです。

自坊にても、坊守が２月に髄膜炎で３週間ほど入院して、無事退院しました。４月中旬には住職が、尿管結石の影響で高熱で腎盂炎を患い、３週間入院の後、自宅で外来加療の後、６月下旬に尿管結石の破壊・摘出手術を受けて７月には、自坊に戻りました。数ヶ月間カテーテルで排尿していた関係で、この管が抜けたら、歌を忘れたカナリヤじゃないけれど、自力で排尿できなくなって、尿閉になり、泌尿器外来で間欠導尿を指導され、日に数回膀胱に管を自分で挿入しての排尿を余儀なくされました。しかし徐々にこの回数も減り、自力で排尿できるまでに戻りつあります。普段は全く無意識での生理現象に過ぎないなのだが、排尿したくても出来ない苦痛と、自力で排尿できた喜びに、感動すら覚える。そんな世界が実際に経験してみないと分からないのだが、ある事に気付かされました。

住職（羽塚　孝和）

報恩講勤修

令和６年１１月９日（土）

午前１０：３０～

勤行・お説教・おとき